

強度行動障害の支援に関するキックオフミーティング 実践報告

強度行動障害への 集中的支援の有効性

～中核的人材・広域的支援人材が果たすべき役割～

社会福祉法人 清心会
発達障がい支援事業所 たかしの
施設長 小笠原浩史

背景：通常支援の限界と地域の課題

現場の深刻な疲弊

激しい特性に対し単一事業所での対応が困難。職員の燃え尽きや受入拒絶が常態化。

社会的孤立の加速

「決まった時間にサービスを提供する」では不安に対応できず、拒絶が繰り返され地域から切り離される。

事例概要：28歳男性（区分6・A重度）

- 特性：自閉症スペクトラム障害（強度行動障害）
- 課題：周囲の騒がしさや、他者の動きへの高い過敏さ
- 状態：見通しが立たない状況下での他害・物損行為
- 目標：安心できる環境構築と、能動的な生活への移行

■ アセスメント：本人の「強み」

- 高い正義感：ルールや秩序を大切にし、構造化された環境に深く適応する
- 非言語理解：身振り手振りを交えた具体的な声掛け・視覚情報を正しく受容する
- 豊かな体力：長時間のウォーキングが可能な、安定の基盤となる高い持久力

行動分析：なぜ不安定になるのか？

【誤学習の定着プロセス】

1. **きっかけ**：気になっている他の利用者が動き出す（本人の強い不安が発生）
2. **葛藤**：利用者の制止を望むが、職員がすぐに対応できない等、自分の思い通りにならない状況に直面する
3. **行動**：強い不満とパニックから、対象の利用者ではなく、目の前の「職員」に向けて激しい他害に及ぶ
4. **結果**：職員への激しい他害が発生したことで現場が緊迫し、結果として（職員が間に入ることで）気になる利用者の動きが止まる

⇒ 「職員に手を出せば、思い通りにならない状況を突破し、自分の環境をコントロールできる」という不適切な誤学習の定着

PRACTICE

実践：「どうしてだろう？」
から始まる支援の再構築

■ 物理的環境の徹底した工夫

- 空間の分離： 体育館倉庫を改装し、刺激の少ない「専用の安心できる場所」を確保
- 動線の整理： 他者の動きが本人の視界に直接入らないよう、物理的距離を維持
- 情報の共有： 気になる相手側の予定も「見える化」し、予期せぬ遭遇とパニックを未然に防ぐ

■ 時間の構造化と役割の付与

- 空白時間の管理：「自由時間」を排除。絵カード等で活動の終わりや次への移行を視覚化
- 明確な見通し：スケジュール表を用い、次に行うべき活動を本人自ら確認できる状態を作る
- 社会的役割の付与：「食缶返し」等の具体的お手伝いを依頼。隙間時間を達成感のある活動へ転換

成果：不安定な行動頻度の劇的減少

支援開始前

毎日発生（自傷・他害）

環境調整導入後

頻度減少・予兆把握可

集中的支援定着後



ほぼ消失！自己調整が可能に

適切なアセスメントに基づく「物理的環境の分離」と「時間の見える化」が、職員への他害の必要性を根本からなくし、本人の自発的な活動と情緒の安定を両立させた。

組織の変化：共通の視点と意識変革

支援の質の平準化

「なぜこの行動が起きるのか？」という共通のアセスメント視点が、担当を問わず全職員に浸透した。

成功体験の共有

当初の負担増への懸念が、本人の劇的な安定という事実を通じて「構造化」への確信に変わった。

提言：専門人材に求められる役割

区分	求められる具体的な役割・機能
中核的人材	事業所内でのアセスメント指揮、環境設定の主導、職員の意識統一。
広域的支援人材	他事業所、医療、行政との多職種連携。地域全体の支援スキルの底上げ。
共通課題	「初期の集中介入」が、長期的な地域生活の安定と現場の負荷軽減に寄与することを証明していく。

ご清聴

ありがとうございました

「そのひとらしさ」を支える地域づくりに向けて

新規事業説明会 実践報告